

【原著論文】

## 英語の複合前置詞の意味変化： 用法基盤理論に基づく意味変化へのアプローチ

山口 和之

外国語学研究室

### A usage-based approach to semantic changes of English complex prepositions

Kazuyuki YAMAGUCHI

**Abstract:** The aim of this paper is to reveal the semantic nature of English complex prepositions, which has not been researched sufficiently. For this purpose, the usage-based approach is used in this study. One of the most important findings in this study is that many complex prepositions change their original meanings into cause/reason senses.

(Received: November 4, 2013 Accepted: January 8, 2014)

**Key words:** usage-based theory, complex preposition, semantic change, cause and reason, cognitive linguistics

キーワード：用法基盤理論，複合前置詞，意味変化，原因と理由，認知言語学

#### 1. はじめに

本研究では、用法基盤理論 (Usage-Based Theory)<sup>1)</sup> に基づき、(1) で示すような英語の複合前置詞 (complex preposition) の意味変化について考察する。英語の複合前置詞とは、単純前置詞 (simple preposition) と他の要素から成り、統語的・意味的観点から1つのチャンク (chunk)<sup>2)</sup> へと変化した例である。

(1) It is hard to see what else they could have done *in view of* the Secretary of State's decision.

国務長官の決定を考慮すると、彼らにできた他のことを想像し難い。(イタリックは著者)

本稿の構成は以下の通りである。次章では、本論文で扱う複合前置詞について概観し、3章では本研究の拠り所となる「用法基盤理論」についての概説そして先行研究の主張を概観する。4章では英語の複合前置詞が多くの場合「原因・理由」の意味に変化することを示し、その理由を5章で論じる。最終章では、本研究の意義を結論として述べる。

#### 2. 複合前置詞について

秋元 (2002: 162) によると、複合前置詞の研究は今日までそれほど多くはない。詳細な複合前置詞研究は Quirk and Mulholland (1964) に始まり、以下で示すように、複合前置詞が現代英語に多いことを彼らは示している。なお、括弧内の数字は COCA<sup>3)</sup> に基づく頻度を示している。

- (2) [in + 名詞 + of] : in aid of (365), in back of (552), in behalf of (AmE) (2749), in case of (3697), in charge of (5756), in consequence of (3719), in (the) face of (476, [+the] 5894), in favor of (10860), in front of (32843), in lieu of (871), in (the) light of (634; [+the] 4139), in need of (2408), in place of (2845), in (the) process of (697; [+the] 1685), in quest of (957), in respect of (657), in search of (5751), in spite of (20739), in view of (5729),
- (3) [in + 名詞 + with] : in accordance with (4807), in common with (1487), in comparison with (1849), in compliance with (431), in conformity with (185), in contact with (740), in line with (2507),
- (4) [by + 名詞 + of] : by dint of (673), by means of

- (2419), by virtue of (1799), by way of (2653)
- (5) [on + 名詞 + of] : on account of (1033), on (the) grounds of (214; [+the , 608]), on the matter of (168), on pain of (67), on the part of (6036), on the strength of (547), on top of (13298),
- (6) [その他] : as far as, as the expense of, at the hands of, at variance with, for (the) sake of, for/from want of, in addition to, in exchange for, in relation to, in return for, with the exception of, with/in reference to, with/in regard to, with/in respect to

Schwenter and Traugott (1995) では, instead of, in place of, in lieu of の通時的変化を詳述し, 秋元 (2002) では, 多くの複合前置詞の 15 世紀から 19 世紀にかけての発達を多くのテキストに基づいて調査している。

本稿では, コーパス (COCA) を使用し, でき得る限り多くの複合前置詞の意味・意味変化を調べ, 以下の間に答えることにより, 本言語現象研究に貢献することをその目的とする。

- (7) a. 複合前置詞の意味変化全体に見られるような共通の意味変化パターンはあるのだろうか。  
b. もし上記のような意味変化が存在するのであれば, それはなぜか。

### 3. 用法基盤理論とは

用法基盤理論を説明する際, 従来の言語理論, 特に生成文法との比較が有益であろう。Langacker (2000) によると, 生成文法は「ミニマリズム」「還元主義」そして「トップダウン」の特徴を持つ。それに対し, 用法基盤理論は以下に示すように生成文法とは対極に位置する言語理論であろう。

- (8) a. 理解には, 百科事典的な知識が必要であり, 一見無駄な情報も脳に蓄積されていると考える。  
b. 言語 (意味) 構造は, 具体的な発話状況 (コンテキスト) から創出される。それゆえ「ボトムアップ」を重視している。  
c. 生成文法とは異なり, 言語特有の能力を想定せず, 人間の一般認知能力に基づいて説明しようとする。(Bybee 2009b, 2010) この点は認知言語学と同じである。

上記からの自然な帰結として, 用法基盤理論では言語は常に変化し, それゆえカテゴリーの境界は常に曖昧であるとする。(Bybee 2010) 用法基盤理論に基づく先行研究は, 例えば Bybee (1998, 2010), Kemmer and Barlow (2000) などがある。本稿では, 主に Bybee

(1985, 1998, 2002, 2006, 2007, 2009ab, 2010) の一連の研究に基づいている。

Bybee (2010) の用法基盤理論研究では「頻度 (効果)」という概念が特に重要である。頻繁に共起する複数の語彙は, 徐々にそれらの統語的境界線があいまいになり, 個々の語彙同様, 1つのチャンクとして記憶に刻まれ, それに伴い意味の変化も生じる。(Bybee 2010)<sup>4)</sup>。Bybee (2010) に従うと, 頻度は「トークン頻度」と「タイプ頻度」に分けられるが, 本稿ではトークン頻度だけを論じる。トークン頻度が高いと, その表現は認知処理上1つのユニットとして自動化され, 表現全体での音声変化や意味変化が生じやすくなる。具体例としては以下の通り。

- (9) a. 下駄箱  
b. 筆箱, 筆が進む・進まない, 筆を折る  
(早瀬・堀田 2005: 82)

上記の下線部分は単独でも用いられるが, 頻繁に1つの表現として使用され, チャンクとして処理され, それぞれの内部の境界線があいまいになり, 意味変化が生じている例である。現在, 元来の意味とは異なり, 下駄箱に入れる履物は「下駄」以外のものがほとんどであろうし, 筆箱に「筆」を入れている人はほとんどいないであろう。

## 4. 英語の複合前置詞

本章では英語の複合前置詞を考察する<sup>5)</sup>。(1)に挙げるような英語の複合前置詞は, 単純前置詞同様, 1つのチャンクとする統語的・意味的理由がある。統語的理由としては, 通常, チャンクに含まれる名詞が冠詞を取らない, 複数形にならない, などの名詞性の喪失とでもいえそうな現象が生じる。意味に関しては, 漂白化 (Bleaching) が生じ, チャンクの個々の意味が薄れ, 全体で1つの意味を表すように変化する。(秋元 2002: 175)

### 4.1. 複合前置詞の意味の変化に関して

多くの用法基盤理論の先行研究にあるように, 通常, 複数の語の使用頻度が増し, 統語的境界があいまいになり, それに伴い意味変化が生じる。(Bybee 2010 参照) この言語変化の特徴は, 複合前置詞にも当てはまる。ここでは, (1)の例にあるように, 'in view of' の, 'view' のもともとの意味「視点」は薄れ, 「考慮する」のような抽象的な意味を表すようになっていく。(2)(3)(4)にある, 複合前置詞を観察すると, 多くの場合元来の意味が薄れ, 「原因・理由」の意味を表す, もしくは示唆することがわかる。以下がその例である<sup>6)</sup>。

- (10) a. The concert is given *in aid of* the blind. (42)  
 (そのコンサートは盲人援助のために催される。)
- b. The money was raised *in behalf of* the strikers in Georgia. (114)  
 (ジョージアのストライキ中の労働者のためにお金が集められた。)
- c. They went in search of Miss Packard. (1165)  
 (彼らはパッカードさんを探しに [パッカードさんのために] 出かけた。)
- d. In view of recent developments we do not think this step advisable. (1443)  
 (最近の情勢を考慮すると [が理由で] この処理が好ましいとは思えない)
- e. In case of fire, ring the alarm bell.  
 (火事の場合には非常ベルを鳴らしなさい。[火事により, 非常ベルを鳴らす行為が生じる])
- f. In light of the bad weather report, we should leave early. (738)  
 (悪天候との予報なので [が理由で], 早めに出発すべきだ。)
- g. In regard to buying new furniture, I think we must wait a few months. (1068)  
 (新しい家具の購入に関しては [のために], 数か月待たねばなるまいと思う。)
- h. I have nothing to say in reference to that incident. (1063)  
 (そのできごとについて [により] 何かを申し上げることはありません。)
- i. by dint of, by virtue of, by means of, by way of
- j. on account of, on (the) ground(s) of, on pain of, on the strength of, on the matter of, on the part of, on top of

説明を要するのは、(10i) と (10j) の出現頻度の低い、原因・理由を表す複合前置詞である。‘by dint of’ の頻度は 673 回 (‘dint’ 単体だと 214 回) しか使われていない。また ‘on pain of’ (「～という罰を受けるという理由に基づいて」) は 67 回, ‘on the strength of’ (「～に基づいて」「～の力を得て」) は 547 回, ‘on the matter of’ は 168 回といずれも出現頻度は他と比べると低い, 「原因・理由」の意味へと変化している。これはなぜだろうか。この問題を解く鍵はおそらく Bybee (2010) の主張する「タイプトークン」にある。つまり, 同じ統語パターンを持つ複合前置詞, [by NP of], [on NP of] に引きずられてそれらが表す原因・理由の意味を表すようになると考えられる。

これは説明を要する言語変化である。しばしば見受

けられる目的論的もしくは問題解決論的に考えると, 1つの言語に必要な意味(機能)を持つ語(句)が1つあれば十分である。(例えば, ある言語が「未来」の概念を必要とするならば, それを表す文法語が1つあれば十分であろう。)しかし, 多くの言語において, 1つの概念(例えば未来)を複数の文法語が表している。「原因・理由」はそのような複数により指示される概念の1つであるが, それらの中でも特異で, 非常に多くの複合前置詞によりこの意味が表される。さらに興味深いことに, この事実は複合前置詞の意味変化だけに見られるのではなく, 単純前置詞 (Radden 1985, Yamaguchi 2005, Dirven 1993, 1995) そして接続詞の意味変化にも見られる。また, 原因・理由と密接に関係する「力(フォース)」が多くの言語の文法で独特の振る舞いをするを考えると (Talmy 2000 参照), 「原因・理由(そして力の概念)」の言語における特異性を説明する必要がある。

## 5. 考 察

認知言語学(意味論)に基づく多くの研究が示すように, 人間の言語構造・意味構造は人間の知覚・認識様式が反映している。(特に Lanacker 2000, Talmy 1978, 2000 などを参照) この言語観は, 用法基盤理論と軌を一にする。(Bybee 2010) 認知言語学では, 人間の知覚・認識パターンは客観的に決定されるのではなく, 主観的なパターンに従い世界が「造られる」と見なす(大堀 2002 参照)が, 多くの場合, 人間はこの世界を(客観的事実とは無関係に)「原因と結果」に基づいて理解している。(Noordman et al. 2000: 35)<sup>7)</sup> ある出来事を知覚し, それを概念化する際, それが何か別の出来事(原因)から生じたのであろうと推測するのである。

本稿の議論と関わる, もう1つの人間の基本的な認識パターンとして「図と地」(Figure and Ground)に基づく知覚・認識様式を挙げるができる。「図」は注意が向けられ, 「特定される対象」であり, 図に対して背景となり, それを「特定する対象」を「地」として私達は物事を知覚・認識する。Talmy (1978, 2000) は, この知覚・認識パターンが言語・意味構造に反映されていることを以下のような例により示している。

- (11) a. The pen lies on the table.  
 ペンはテーブルの上にある。
- b. ?The table is under the pen.  
 ?テーブルはペンの下にある。

Talmy によると, 位置関係を表すときは, 「地」が場所を表す前置詞句, 「図」がそれによって特定される名

詞句（通常主語）である。図（主語）と地（前置詞句）の言語構造と、知覚の図（the pen）と地（the table）のそれが合致した（11a）は自然な文と見なされるが、（11b）のように、言語構造と知覚の図と地が一致していない文は不自然とみなされる。Talmy（2000 vol. 1: 328）はまた、原因と結果の関係もまた「図」と「地」として認識されるとする。

(12) Cause-result principle: The unmarked (or only possible) linguistic expression for a causal relation between two events treats the causing event as Ground and the resulting event as Figure.

(12) に従うと、原因や理由は「地」として、その結果は「図」として通常認識される。(11) で考察したように、言語構造に関しては、「図」が主語などの特定される表現、「地」は前置詞句などの何かを特定する表現となる。ここまでの議論を踏まえると以下のような説明が可能であろう。つまり、複合前置詞はその性質上、通常主語と動詞句からなる文の核を「特定する」し、「地」の機能を担っている。上記の通り、人間はこの世界を（客観的事実とは無関係に）「原因と結果」に基づいて理解し、「原因・理由」は「地」として通常認識される。そのため、複合前置詞がそのような意味を表すように変化する。

## 6. 結論と今後の展望

本研究では、用法基盤理論に基づき英語の複合前置詞の意味変化について考察した。英語の複合前置詞とは、単純前置詞と他の要素から成り、統語的・意味的観点から1つのチャックへと変化する。英語の複合前置詞研究への本稿の貢献は、それらの意味変化が、多くの場合、原因・理由の意味に変化することを示し、その理由を論じた点にある。原因・理由は多くの複合前置詞の意味変化に見られる、という言語事実は、この意味の特異性を主張し、それに基づき特定の言語現象を明らかにしようとしてきた試み、例えば Croft (1991), Sweetser (1988), Talmy (2000) を支持する。また、本稿での議論・主張は、文法化研究・認知言語学・用法基盤主義の考えを支持するもので、特に原因・理由のような一般認知能力が言語・意味の構造に深く関わることを示している。

今後の研究課題の1つとしては、頻度と原因・理由の意味変化の関係が挙げられるだろう。(2) (3) (4) (5) で示している複合前置詞の出現頻度と原因・理由の意味変化はいかなる関係があるのだろうか。出現頻度の高さが必ずしも原因・理由への意味変化の条件で

はないように思われるが、意味変化の条件はどのようなものであろうか。当該研究に関する今後のさらなる発展を待ちたい。

## 注

- 1) 本稿を通して、用法基盤理論 (Usage-Based Theory) という用語を Bybee の一連の研究に倣い使用するが、用法基盤モデル (Usage-Based Model) という用語のほうが（少なくとも日本では）一般的であろう。
- 2) 発話・理解する際、1つのユニットとして処理される表現。秋元 (2002) はイデオムと同じように扱っている。
- 3) COCA (Corpus of Contemporary American English) は Brigham Young University の Mark Davies によって作られたコーパスである。BNC の4倍の大きさを誇り、無料で使用できる。
- 4) どの程度1つのチャックとして機能しているのかは、コーパスに基づいて調べることができる (Bybee 2011)。
- 5) 本稿では、用法基盤理論の枠組みを利用した分析をしているが、複合前置詞の分析は文法化研究やイデオム化研究と見なすこともできる (秋元 2002: 175)。
- 6) 例は全て小西 (1974)。括弧内の数字は頁数。
- 7) "Causality is an important ordering principle of human perception and human experience, and thus a central category in human cognition." (Noordman et al. 2000: 35)

## 参考文献

- 秋元実治 2002. 『文法化とイデオム化』東京：ひつじ書房
- 大堀壽夫 2002. 『認知言語学』東京：東京大学出版会。
- 小西友七 1974. 『英語前置詞活用辞典』東京：大修館書店
- Beckner, Clay and Joan Bybee. 2009. A usage-based account of constituency and reanalysis. *Language Learning* 59: 27–46.
- Bybee, Joan L. 1985. *Morphology: A study of the relation between meaning and form*. *Typological Studies in Language* 9. Amsterdam: John Benjamins.
- . 1998. A functionalist approach to grammar and its evolution. *Evolution of Communication* 2: 249–278.
- . 2002. Word frequency and context of use in the lexical diffusion of phonetically conditioned sound change. *Language Variation and Change* 14: 261–290.
- . 2006. From usage to grammar: the mind's response to repetition. *Language* 82(4): 711–733.
- . 2007. *Frequency of use and the organization of language*. Oxford: Oxford University Press.
- . 2009. Grammaticization: implications for a theory of language. In J. Guo, E. Lieven, S. Ervin-Tripp, N. Budwig, S. Özçalian, and K. Nakamura (eds.), *Crosslinguistic Approaches to the Psychology of Language: Research in the Tradition of Dan Isaac Slobin*. New York: Taylor and Francis Group, LLC. 345–355.

- . 2009. Language universals and usage-based theory. In M. H. Christiansen, C. Collins, and S. Edelman (eds.), *Language Universals*. Oxford: Oxford University Press: 17–40.
- . 2010. *Language, usage and cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bybee, Joan L. and Beckner, Clay. 2010. Usage-based Theory. In Bernd Heine and Heiko Narrog (eds.), *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis*. Oxford: Oxford University Press: 827–856.
- Bybee, Joan and Östen Dahl. 1989. The creation of tense and aspect systems in the languages of the world. *Studies in Language* 13: 51–103.
- Bybee, Joan and William Pagliuca. 1985. Cross linguistic comparison and the development of grammatical meaning. In Fisiak, Jacek (eds.), *Historical semantics, historical word formation*: 59–83. Trends in Linguistics, Studies and Monographs 29. Berlin: Mouton de Gruyter.
- . 1987. The evolution of future meaning. In Ramat, Carruba, and Bernini (eds.): 109–122.
- Bybee, Joan L., William Pagliuca, and Rever Perkins. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, aspect, and modality in the language of the world*. Chicago: University of Chicago Press.
- Croft, William. 1991. *Syntactic Categories and Grammatical Relations. The Cognitive Organization of Information*. Chicago: Chicago University Press.
- Dirven, René. 1993. Dividing up physical and mental space into conceptual categories by means of English prepositions. In Cornelia Zelinsky-Wibbelt (eds.), *The semantics of prepositions: From mental processing to natural language processing*: 73–98. Berlin: Mouton de Gruyter.
- . 1995. The construal of cause: The case of cause prepositions. In J. R. Taylor and R. E. MacLaury (eds.), *Language and Cognitive Construal of the World*: 95–118. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Lagngacker, Ronald W. 2000. Dynamic Usage-Based Model. In *Usage-Based Models of Language* (eds.) Michael Barlow and Suzanne Kemmer: 1–65, CSLI Publications, Stanford.
- Quirk, Randolph and Joan Mulholland. 1964. Complex prepositions and related sequences. *English Studies Presented to R. W. Zandvoort on the Occasion of his Seventieth Birthday*: 64–73.
- Radden, Gunter. 1985. Spatial metaphors underlying prepositions of causality. Paprotté, Wolf, and René Dirven (eds.), *The ubiquity of metaphor*: 177–207. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Schwenter, Scott A. and Elizabeth C. Traugott. 1995. The semantic and pragmatic development of substitutive complex prepositions in English. *Historical Pragmatics* (ed.) Andreas H. Jucker: 243–273. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Sweetser, Eve. 1988. Grammaticalization and semantic bleaching. In Shelley Axmaker, Annie Jaisser, and Helen Singmaster (eds.) *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*: 389–405.
- Talmy, Leonard. 1978. Figure and Ground in Complex Sentences. In J. Greenberg, et al. (eds.), *Universals of Human Language, vol. 4*: 625–649. Stanford: Stanford University Press.
- . 2000. *Toward a Cognitive Semantics vol. 1&2*. Cambridge, London: The MIT Press.
- Yamaguchi, Kazuyuki. 2005. *A Typological, Historical, and Functional Study of Adpositions in the Languages of the World*. Doctoral dissertation, University of New Mexico.

〈コーパス〉

COCA (Corpus of Contemporary American English)

〈連絡先〉

著者名：山口和之

住 所：東京都世田谷区深沢 7-1-1

所 属：外国語学研究室

E-mail アドレス：kazuyamaguchi@nittai.ac.jp